

# 平安時代における刺繍用途の変遷：平安時代の文献の記述を基にして

著者名(日)	桜井 彩, 長崎 巖
雑誌名	共立女子大学家政学部紀要
巻	62
ページ	1-19
発行年	2016-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003061/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003061/</a>

# 平安時代における刺繍用途の変遷

## －平安時代の文献の記述を基にして－

Change in the use of embroidery in the Heian Period  
—Based on the description of documents in the Heian Period—

桜井彩・長崎巖

Aya SAKURAI, Iwao NAGASAKI

### 1. はじめに

刺繍とは、『広辞苑』にも「布地に糸で絵画や文様を縫い表すこと。また、そのもの。」<sup>1)</sup>と項目があげられているとおり、針などを用い、布地に糸を通し、あるいはかがって、自由に、また時には規則的に、絵画や模様を表現することである。それは、生地を縫い合わせ衣服などを作る裁縫とは区別される。「縫い合わせる」という行為は、人が人らしい生活を始めたその時から存在したと推測されるが、そこから、同じく針と糸をもって模様を表す刺繍が、装飾的

な意味として成り立ち、独立した技術として存在するようになったのはいつであったのだろうか。

日本における刺繍の歴史は飛鳥時代に始まったと言われている<sup>2)</sup>。中宮寺伝来の「天寿国繡帳」、法隆寺・東大寺伝来裂など残っている実物資料(表Ⅰ)、『日本書紀』、『大安寺資財帳』などの文献資料の記述から、日本における刺繍は仏教の伝来と時を共にして始まったことがわかる。

続いて遺物が多く見られるのは、鎌倉時代以降である(表Ⅱ)。巖島神社旧蔵の「大日如来像」

表Ⅰ - 飛鳥・奈良時代の実物資料

時代	製作年代	分類	作品名	種別	主な使用技法	当初の使用者	製作理由	所蔵
飛鳥	622	宗教	天寿国繡帳	繡帳	まつり繡	推古天皇	聖徳太子の死	中宮寺
飛鳥	699 頃	宗教	天人文幡足裂	幡	両面繡針	法隆寺	金銅灌頂幡	藤田美術館
奈良	752	宗教	花壇鳥文刺繡裂	帳	刺し繡、似繡、駒繡	東大寺	東大寺大仏開眼	正倉院
奈良	752	宗教	紫皮段文珠玉節刺繡羅帯殘欠	帯	刺し繡	東大寺	東大寺大仏開眼	正倉院
奈良	757	宗教	唐花文幡頭	幡	刺し繡、まつり繡	東大寺	聖武天皇一周忌	松浦美術館
奈良	757	宗教	唐花文幡身	幡	刺し繡、駒繡	東大寺	聖武天皇一周忌	MOA 美術館
奈良	757	宗教	蓮花文幡頭	幡	刺し繡、駒繡	東大寺	聖武天皇一周忌	正倉院
奈良	757	宗教	宝相草文幡頭	幡	刺し繡、駒繡	東大寺	聖武天皇一周忌	正倉院
奈良	757	宗教	花樹孔雀文刺繡裂	幡	刺し繡	東大寺	聖武天皇一周忌	正倉院
奈良	799 頃	宗教	宝相草唐草文天蓋墨節	墨節	刺し繡、似繡	東大寺		東京国立博物館
奈良(唐)	800 頃	宗教	獅子吼進珠門文裂	幡	似繡			飯沼寺
奈良(唐)	800 頃	宗教	如来說法圖(勸修寺繡帳)	繡仏	似繡、相良	勸修寺		奈良国立博物館

表Ⅱ - 鎌倉時代以降の実物資料

時代	製作年代	分類	作品名	種別	主な使用技法	当初の使用者	製作理由	所蔵
鎌倉	13C	宗教	大日如来像	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり	嚴島神社		細身美術館
鎌倉	13C	宗教	不動明王二童子像	鎌仏	刺し縫			浜松市
鎌倉	1323-1325	宗教	三昧耶幡	幡	刺し縫、まつり、留縫	兵主大社		奈良国立博物館
鎌倉	14C	宗教	種子阿弥曼荼羅図	鎌仏	刺し縫、留縫、まつり、返し縫			太山寺
鎌倉	14C	宗教	五髻文珠菩薩像	鎌仏	刺し縫、半返し縫、歪糸			大和文庫館
鎌倉	14C	宗教	釈迦・阿弥陀二尊像	鎌仏	刺し縫、留縫、駒縫、平縫			個人
鎌倉	14C	宗教	阿弥陀三尊来迎図	鎌仏	刺し縫、留縫、返し縫、まつり縫			徳川美術館
鎌倉	14C	宗教	種子阿弥陀三尊像	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫	高野山極楽院		個人
鎌倉	14C	宗教	種子阿弥陀三尊像	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫			MOA 美術館
鎌倉	14C	宗教	法華經方便第二断図	経文				個人
鎌倉～室町	14C	宗教	阿弥陀三尊来迎図	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫			中宮寺
鎌倉～室町	14C	宗教	阿弥陀三尊来迎図	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、駒縫、留縫	神光院		個人
鎌倉～室町	14C	宗教	阿弥陀三尊来迎図	鎌仏	刺し縫、まつり			
鎌倉～室町	14C	宗教	種子阿弥陀三尊像	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫			個人
鎌倉～室町	14C	宗教	六字名号	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫	東寺常福地 (江戸初期)		宝蔵寺
鎌倉～室町	14C	宗教	八幡大菩薩神号	鎌仏	刺し縫、平縫、まつり、留縫			個人

(細見美術館蔵)<sup>3)</sup>、兵主大社旧蔵の「三昧耶幡」(奈良国立博物館蔵)<sup>4)</sup>など、ここでも刺繍は仏教美術に多く用いられている。新たに始まった武士の時代にも、仏教を信仰し普及するための手段として、刺繍による仏画類が多く制作されていたと考えられる。

それではその間をつなぐ平安時代はどうか。すでに先達が述べているように、実物資料が少ないことから平安時代における刺繍についての先行研究は非常に限られている<sup>5)</sup>。しかし、その一方で、多くの古文獻に刺繍に関する記述が見られることから、刺繍がこの時代の人々の生活をいろいろな場面で彩ってきたであろうことが推測される。

そこで本稿では、現在作品がほとんどない現状に鑑み、主に平安時代に記された文献に見られる刺繍についての記述をもとに、平安時代に刺繍が人々にどのように認識されていたのか、また、この時代の刺繍がどのように変遷したのかを明らかにし、更にその実態を確認することとしたい。

## 2. 研究方法

平安時代は、記録(日記を含む)、物語が大きく発展した時代である。10世紀から11世紀にかけては特に日記の発生と流行がみられる。日記は、『日本書紀』『正倉院文書』の中に具中暦に書かれたものがまず現れ、『類聚符宣抄』弘仁12(821)年7月13日の条に「日記」という言葉が初めて見えることから、そのあたりを発端に、次第に記されるようになったと考えられる。寛平(889～898)・延喜(901～923)の頃にはその勢いは強くなり、官庁では内記日記・外記日記という形で、宮廷では殿上日記という形で、多く記録が残された。王朝文化が爛熟し、朝儀典礼が形式化したことで、故実や旧慣が重視され、その記録が必要に応じて残されたことがわかる<sup>6)</sup>。

物語も、9世紀後半から10世紀半ばに物語の祖と言われる『竹取物語』が成立し、その後、歌物語の発達とともに10～11世紀を中心として数多く出現した。『源氏物語』をはじめとする物語の中では、情緒豊かな表現で宮廷生活が華やかに描かれているが、刺繍についても生活

用品、衣裳に見られ、様々に描写されている。

このように10～11世紀にかけて、文学・記録の最盛期がおとずれ、当時の様子を詳しく伝えるものが多く産み出された。公家たちによる有職故実や日々の公務・私事の出来事の記録などである。また、女性たちによる宮廷生活を描いた様々な物語も多く現れた。貴族を中心としたものではあるが、公文書以外の様々な資料に、日々の生活が垣間見られる時代となったのである。

そこで、古文書、古記録、物語などの文学作品、その他の文献資料を利用し、刺繍に関わる語彙を拾い出し分析することで、平安時代における刺繍の実態を探り、その変遷を明らかにする。

### 3. 刺繍にかかわる言葉

「刺繍」という言葉は、中国では古くから使用されている言葉であり、王充(27年-1世紀末)の記した『論衡』程材篇<sup>7)</sup>には「齊都世刺繡、恆女無不能(成都では代々刺繡をするのでふつうの女はできない者がない)」、「刺繡之師能縫帷裳(刺繡の師は、婦人の車の飾幕をも縫える)」といったように、人材の一例として刺繡をする人のことがあげられている<sup>8)</sup>。杜甫(721-770)の詩「小至詩」にも「冬至陽生春又來。刺繡五紋添弱線。」とあり、冬至を過ぎ、女工たちが刺繡の線を多く刺せるようになった、という一節を見ることが出来る<sup>9)</sup>。

また、その他にも「刺繡」と同義の「繡」という言葉があり、100～121年に成立した『説文解字』<sup>10)</sup>にすでにその項目が見られる。そこでは「繡、五采備也、从糸肅聲」<sup>11)</sup>と説明され、「繡」が五采(色彩)を備えるものであったことがわかる。

一方、日本においては、近代まで「刺繡」という語は用いられなかったが、平安時代中期の漢和辞典であり百科事典としても利用されていた『和名類聚抄』<sup>12)</sup>に、「繡」の項目が見られ、

繡 蔣飭切韻云繡繡以五色絲刺萬物形状也

と記載されている。「繡」を反切<sup>13)</sup>では「息又xyou」と発音し、訓では「沼無毛乃(ぬむもの)」とよみ、その内容は「五色の糸をもって万物の形状を刺す」と説明されている。江戸時代後期に成立した『和名類聚抄』の注釈書『箋注和名類聚抄』<sup>14)</sup>の「繡」の項目にも、

蔣飭切韻云、繡息又反韻無毛乃、○惟古記云繡比毛乃、以五色絲刺萬物形状也

とあり、『日本書紀』推古天皇紀や『枕草子』に、「奴比毛乃(ぬひもの)」とあるのは、「奴无毛乃(ぬむもの)」の転化(なまり)であるとしている。

以上のことから、現代の刺繍、すなわち、「糸を用いて絵画・模様を表現すること」を意味する言葉は、平安時代には「沼無毛乃(ぬむもの)」「奴比毛乃(ぬひもの)」と呼ばれ、漢字の表記では「繡」の文字を用いていたことが確認できた。

そこで、平安時代に記された文献資料より「繡」「ぬひもの」に直接関連する語彙、及びその意味において刺繡に関わるものを拾い出す作業を行った。抽出した語彙は以下の通りである。

- (1) 「繡」及び、これと同義の「綉」「縫」「ぬひもの」「ぬふ」
- (2) 刺繡に使用される道具である「糸」「絲」「針」
- (3) 繡うという意味に置き換えられる「刺す」「置く」

その結果、186件の用例を確認することができた。(表Ⅲ)<sup>15)</sup>

平安時代に記された資料には、漢文体のものと和文体のものがあるが、いずれも

打敷白羅、繡春野松・桐・柏樹等

『御堂関白記』寛弘7(1010)年1月

- 4 -

平安時代における刺繍用途の変遷

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
29	政治要略	975	900	天延 3.2.25	就(レ)中賀石清水等臨時察使陪從等所(レ)率從者。兼(レ)有(二)源氏(一)。所(レ)着衣裝。非(二)段羅錦(一)其(左に●)(レ)不(左に●)(二)着用(一)。	錦織		衣服		
30	宇津保物語	980	900		尚侍の殿のは、酒紫の糸毛に唐島くさらせ縫はせたまへり。	ぬはせ	牛車	生活用品	唐島 (外国の島)	尚侍の殿
31	宇津保物語	980	900		宮の御は二壁に、雲だすき、秋の野の形を移し、薄、虫、鳥の形を色々に縫はせたまへり。	ぬはせ	牛車	生活用品	くもたすき、 秋の野さつき、すすきむし、とり	女一宮
32	宇津保物語	980	900		いとなまめかしう、さまざまにおかしう、取にも唐草の形を縫はせたまへり。	ぬはせ	しりがひ	生活用品	唐草	女一宮
33	宇津保物語	980	900		下簾も香の地に薄物置ねて、小鳥、蝶などを縫ひたり	ぬひ	下簾	生活用品	ことり、てふ	女一宮
34	宇津保物語	980	900		戸口に朽葉の裾連の几帳の縫物したる立てて	ぬいもの	几帳	生活用品		尚侍の女房
35	宇津保物語	980	900		藤芳の裾連の持て出だして、絵描き、縫物したる、几帳ども、三十人の大人取り縫きて、	ぬい物	几帳	生活用品		大人の女房 30人
36	宇津保物語	980	900		また、いぬ宮の御方の人に、紫の裾連に縫物して、唐組を紐にしたる三十人、	ぬい物	袈裟	衣服 (女性)		いぬ宮付き の女房
37	宇津保物語	980	900		百五十石ばかりの船六つ、楳皮葺きの船具して、金銀、瑠璃に装束かれ、大きな高櫓を打ちつけ、帆手上げて、白き糸を太き綱になひ、大いなる船給にて、船の生活用品に遊び、すべて御座どもなども縫物などして、船六つに、船子二十人ばかり、排取四人、装束遊び、かたちを整へて、国々の受領ども、一つづつ御船の装束どもとして奉りたるに、	ぬるもの	御座	生活用品		大宮、女御 その他
38	宇津保物語	980	900		三の宮取りたまひて、中納言にさしやりたまひつれば、唐の縫物の装に入れたり。	ぬいもの	袋	生活用品	唐物	尚侍の殿
39	宇津保物語	980	900		南向きにおはすれば、南と西との間に、櫓をくり物にしたる三尺の屏風。唐船の櫓したる御座など、中納言殿の敷き置きたるものどもあり。	さしたる	御	生活用品		藤登
40	宇津保物語	980	900		[給指示] 大人、重、居並みたり。あざやかなる装束ども、色々縫ひたり。	ぬひたり	装束	衣服 (女性)		大人の女房、 女室
41	皇太后詮子聖 徳合	986	900	寛和 2.7.7	瑠璃の登に花挿したる臺の敷物に、筆手にて縫へる。	ぬへる	敷物	生活用品	簪手	左方
42	小右記	987	900	永延元 .4.29	廿九日、辛酉、早朝参院、奉為先后(藤原安子)被行法會、装束云々、鎮阿弥陀淨土曼陀羅・金泥法華經、自餘御尊體具云々、	縫	曼荼羅	宗教		藤原安子
43	政治要略	988	900	永延 2.4.14	太政官符一應(レ)兼(下)朝服察使多隨(二)歩卒僕從(一)着(中)・用段羅錦納衣袴(上)事【附注】永延四ヶ條内【附注ここまで】右僕從之法。前立(二)品秩(一)。儀約之縫。唐時(二)藤制(一)。而頃年之間。藤察使等、或隨(二)數多之歩卒(一)。衣袴費(二)段羅(一)。或列(二)七八之重僕(一)。服用防(二)錦織(一)。	錦織	服	衣服		察使の重僕
44	政治要略	990	900	永祿 2.4.1	右辨官【附注】下院非遣使【附注ここまで】雜事二節條狀一(□で囲みあり)定(二)使【附注】察使一典侍車并前庭敷(一)事右年条件使典侍前庭不(レ)少。後車亦多。服(二)錦織(一)而半邊。從(二)羅織(一)而。	羅織	袈裟	衣服		察使の典侍、 前庭
45	政治要略	1000	1000		衣服令云。服色。白黄丹紫紅芳緋紅黄緋緋緋。【附注】。縹者三染緋也。縹者紫紫之色最淺者也【附注ここまで】。緋緋縹縹黄縹黄縹縹縹如(レ)此之屬。紫以下。各兼得(レ)服(レ)之。【附注】。假令寄(レ)紫之人。兼得(レ)服(二)藤芳以下諸色(一)之類。此條包為(二)男女(一)立(レ)制。【附注ここまで】	染縫		不明		縫者
46	東寺百合文書	1000	1000	長保 2.11.26	一北室藏納雲燒失物等 / 仏具 / 金堂講堂大幡幃六流 同天蓋(中略) / 大金鼓二口 仰塔流屋二果 經鼓一面 縫物大幡一流 灌頂足五流 / 諸國末寺公映	縫物	大幡	宗教		東寺
47	枕草子	1001	1000		むつかしげなるもの 縫ひ物の裏	ぬひもの		不明		
48	政治要略	1002	1000		衣服令云。(中略)並位横加(二)縫襦(□で囲み有)襦。	縫	襦袢	衣服		
49	政治要略	1002	1000		又儀制令云。(中略)若任(二)六位以下官(一)者礼服則不(レ)加(二)縫襦(一)。可(レ)加(二)縫襦(一)。	縫	襦袢	衣服		
50	御堂関白記	1004	1000	寛弘 1.2.5	中宮(彰子)二服、唐段羅文縫、	文縫		不明		中宮彰子
50'	御堂関白記	1004	1000	寛弘 1.2.5	中宮(彰子)二服、唐段羅文縫、	文縫		不明		中宮彰子
50''	御堂関白記	1004	1000	寛弘 1.2.5	中宮(彰子)二服、唐段羅文縫、	文縫		不明		中宮彰子
51	小右記	1005	1000	寛弘 2.3.8	啓事由、左府於御前令舞求子。【附注】舞人地招侍、所々持香盤奏、以金鼓・絃索・金鑼等交誦、或有五重綾羅袴等、事突不可敷云々【附注ここまで】、舞了舞人・陪從給後、上達部以下唐從上	金縫	袴	衣服		求子舞人

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
52	政治要略	1005	1000	寛弘 2.10.19	暗成 (二) 千花錦襦之帳 (一)。	錦襦	帳	生活用品	千花	
53	本朝文粹	1005	1000	寛弘 2.10.19	暗成 (二) 千花錦襦之帳 (一)。	錦襦	帳	衣服 (女性)	千花	
54	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5.9.11	人々の局々には、大きやかなる襦、包ども持てちがひ、唐衣のぬひ物、袷ひきむすび、襦、ぬひ物、けしからぬまでして、ひきかくし、「肩をもてこぬかな」など、いひかはしつつ、けそうじつくろふ。	ぬひ物	唐衣、襦	衣服 (女性)		女房
55	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5.9.11	腰はうすもの、唐草をぬひたり。少将の君は、秋の草むら、篠、鳥などを、白綴してつくりかかやかしたり。	ぬい	腰	衣服 (女性)	唐草	女房
56	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5.9.15	大式部のおもとの襦、唐衣、小塩山の小松原をぬひたるさま、いとおかし。大式部は陸奥の守の妻、殿の宣旨よ。	ぬいたる	唐衣	衣服 (女性)	小塩山の 小松原	女房
57	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5.9.15	弁の内侍の、襦に白綴の洲浜、鶴をたてたるしざま、めずらし。袷のぬひ物も、松が枝のよはひをあらそはせたる心ばへ、かどかし。	ぬひ物	襦	衣服 (女性)	松がえの 鶴	女房
58	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5	襦、唐衣のぬひ物をばさるることに、袖口におきぐちをし、襦のぬひ目に白綴の糸を伏組のやうにし、	ぬひ物	唐衣、襦	衣服 (女性)	伏組	女房
59	紫式部日記	1008	1000	寛弘 5.9.11	若き人々は襦物、襦など、袖口に置口をし、銀の左右の糸して伏組し、よろづにし縫ぎ合へり。	ぬひ物	襦束	衣服 (女性)		女房
60	源氏物語	1008	1000		迹の折敷四つ、紫襦の高坪、藤の斑透の打敷に折枝縫ひたり。	ぬひ	打敷	生活用品	折枝	
61	源氏物語	1008	1000		閑屋よりさとはづれ出でたる旅姿どもの、いろいろの襦のつきづきしき襦物、括り染のさまもさる方にをかしう見ゆ。	ぬいもの	袴衣	衣服		大臣 (光源氏) 一行
62	紫式部日記	1009	1000	寛弘 6	上におなじ色の圓紋の五重、桂、葡萄染の浮紋のかたぎの紋を縫ひたる、縫ひざまへかどかし。	ぬひざま		衣服 (女性)		女房
63	御堂関白記	1010	1000	寛弘 7.1.15	十五日、乙丑、犬宮御五十日、(中略) 其後供御膳、傳膳、打敷白綴、縫着野松・桐・柏樹等。	縫	打敷	生活用品	春野松、 桐、柏樹	敦良 (後朱雀天皇)
63'	御堂関白記	1010	1000	寛弘 7.1.15	(裏書) 十五日、其後供御膳、傳膳 (藤原道綱) し、打 (× 白) 敷白綴、縫着野松・桐・柏樹等。	縫	打敷	生活用品	春野松、 桐、柏樹	敦良 (後朱雀天皇)
64	小右記	1011	1000	寛弘 8.9.16	今日將監仲直 (身人部) 持来左兵衛・右衛門 [兵衛] 符 [府] 旗、足置等物也。符 [府] 大儀、大儀具納合焼亡慈焼失、符 [府] 之焼失、爲本令聞也 [注] 虎符事 [注] 此こまで、但左兵衛符 [府] 禮禮雖有左虎符事者、見件此禮年來慎耳。	縫	禮禮	生活用品		右近衛府
65	御堂関白記	1016	1000	長和 5.1.17	十七日、壬戌、(中略) 候内蔵寮御即位銀具焼亡一 (之方) 次第以焼了、就中執事等物、爲取持来、見之被出有其数、本庭縫物也。	縫物	圓 (きぬがさ)	生活用品		後一条天皇
66	小右記	1017	1000	寛仁元 .9.21	廿一日、丙辰、地招袴 [制注] 唐、象、藤村邊 [制注] 此こまで] 以致 (平) 光令儀、今日持来、給定規 今日親王出宮内省、被親東河、入野宮、上通郎前、大納言俊賢 [制注] 皇太后宮大夫 [制注] 此こまで] … (中略) … 見物者云、御風向給河原云、被路用侍賢門大路云、明日大殿被参石清水之御人持、[制注] 地招、唐袴、久々、堅組、腰象、縫着、染藤村邊、三重袴、[制注] 此こまで] 貴氏以右衛門權佐ひ侍奉之。	縫	袴	衣服	菊	石清水之御人
67	紫式部日記	1021	1000	治安元	妙法一条の經典、文字ごとに空しかるべからず、綾羅、錦、貴金、珠玉の飾りたまへる衣の裏に、一葉の珠を懸けたまひつ。決定して二世の大原相叶はじや。	錦襦	衣	衣服 (女性)		例え
68	小右記	1021	1000	治安元 .10.29	祭使右近衛權中將長春藤院院出立、関白所住、送迎袴、々々、重袴三箇	縫	袴	衣服		春日祭使
69	小右記	1021	1000	治安元 .12.5	五日、乙巳、宰相云、昨日関白已下参會御堂、念仏僧等裝束、綾羅錦襦以之爲衣被、上通郎直衣太以鮮明、未有如此者。	錦襦	僧等裝束	宗教		僧
70	大鏡	1022	1000	治安 2.7.14	秋の襦物の三重襦の御唐衣に、秋の野を襦物にし、給にも描かれたるにやとぞ、目もとどろきて見たまへし。	ぬひもの	襦	衣服 (女性)	秋の野	中宮 (威子)
71	紫式部日記	1023	1000	治安 3.10.13	色色の襦物、錦、唐袴など、すべて色をかへ、手をつくしたり。袖口には紐、貴金の置口、襦物、襦をせたり。御几帳とも色々さまざまなり。	ぬいもの (西 : ひ)	袖口	衣服 (女性)		女房
72	紫式部日記	1023	1000	治安 3	かくて遊らせたまひて、仰しつらひを御覧すれば、藤の斑透の襦物の御几帳に、折枝を縫ひたり。	ぬひ	几帳	生活用品	折枝	几帳
73	小右記	1024	1000	万寿元 .4.17	夜宰相来云、参拜門 (出見)、即被見物、中宮權大夫隨信御使御車後、関白同被見物… (中略) … 今日皇親來改訂、以唐白綴「爲出給、昨局制 (即) 瀧口等若親隨錦袴衣・袴口 (等) 云々」王法滅盡、嗚呼無益、山介 (城脱力) 重方 (茂田) 於見物所傳聞脱衣給之。	錦襦	袴衣	衣服		實資隨身
74	紫式部日記	1028	1000	万寿 5.1.22	御法事は正月にせさせたまふれば、夜を旦によろづいそがせたまふ。御仏は極楽浄土に歸仏にさせたまふ。	ぬひ仏		宗教	歸仏	道長

平安時代における刺繍用途の変遷

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
75	栄花物語	1030	1000	長元 3.4.1	その日の儀式有様など、いへばおろかなり。若紅に葡萄染の表袴、柳の唐衣、色懸されたるは二重綾物、ただの人々は給書き、縫物し、えもいはず挑みつくりたり。	ぬひもの	唐衣	衣服(女性)		女房
76	栄花物語	1031	1000	長元 4.9.26	あるは直衣・袴、あまたは袴衣縫えひやる方なきに、綾物、打物、錦、綾物など、心ごろにめでたくをかしく見ゆるほどに。	ぬひ物	袴衣	衣服		殿上人、上達部
77	小右記	1031	1000	長元 4.9.25	廿五日、庚午、今日女院参給八幡・住吉・天王寺、多爲遊樂狀、万人起衆、世以爲奇(奇)、扈從上下袴衣綾束、色々折花店綾羅或五六重、其綾羅二倍文綾物、下衣等不知何綾、隨身綾束不懂意法、似奴王威。	綾	袴	衣服		扈從
78	小右記	1031	1000	長元 4.9.25	今日御幸作法已無所據、上下之人衆數日之間、被取數重、改色折花、幕不綾羅綾羅、或上達部着毛襪、以金銀爲莊嚴、未見其(未カ)聞事也。	錦綾		衣服		
79	栄花物語	1033	1000	長元 6.4	かへさには、村瀬にて、袴、表袴も、綾、唐衣も薄物にて、文には金をし綾物どもをし、心ごろに給などかきたれば、涼しげになまめかしうをかし。	ぬひ物	唐衣、綾	衣服(女性)		女房
80	栄花物語	1035	1000	長元 8.5.15	殿人綾二藍のうつくしき取りひろげ敷くを見れば、紫の浮線綾に書き象眼をつけて伊勢の海といふ能馬寮を筆手に縫ひたり。	ぬひ	打敷	生活用品	羣手(伊勢海さいばら)	左方
81	関白左大臣頼通歌合	1035	1000	長元 8.5.16	紺色源頼朝(二)地敷(一)【翻注】三重ノ杜若色ノ浮線綾、象眼ヲ以ツテ裏ト爲シ、其ノ上ニ重ネテ羣手ヲ縫フ。其ノ裏ニ組ヲ以ツテ文ヲ縫ハム【翻注ここまで】到(二)附下(一)	縫う	地敷	生活用品	羣手	左方
82	栄花物語	1037	1000	長元 12.13	御紐などは、殿より奉らせたまへり。葡萄染の二重綾物、単は打ちたる、白き文を据あたり。紺は紅梅、書きに梅の折枝を綾物にもし、綾にも縫たり。	ぬひもの	御紐の綾筋紐	生活用品	梅の折枝	御台台
83	栄花物語	1046	1000	承承元 7.10	色懸されぬは金して綾物し、給かき、綾物など、いみじうもの狂ほしきまでつくしたり。脇道り、口置き、袴の附きに金して、綾物にも打袴をしたる人もあり。その心ばへある歌を綾物にもしたり。	ぬひ物	袴	衣服(女性)	心ばへある歌	女房
84	栄花物語	1049	1000	承承 4.11.9	中宮の女房まで、紅紫を縫りつくしたり。打物、綾物、村瀬など心々にいとおかし。薄物に打ちたるを透かしたるも、綾物し、銀の水遣り、紅紫の散り交ひたるなど、いとおかしくなまめかし。	ぬひ物	薄物に透かしたる綾	衣服(女性)	紅紫	女房
85	栄花物語	1050	1000	承承 5.3.15	女房は、袴ともに、萌黄の打ちたる、山吹の二重綾物の表袴、藤の唐衣、萌黄の綾に給書き、綾物し、綾物し、口置など、目もあやに、「心ゆきて」などいふ歌を、金の具のちひさきを廻りて、歌給にて桜の咲きこぼれたるかたをかきたり。	ぬひ物	綾	衣服(女性)		女房
86	皇后宮寛子春秋歌合仮名日記	1050	1000	天西 4.4.30	われもわれもとおなじ様に、表衣・綾・唐衣、みな二重綾物、文に秋の古き歌を、心に縫りつけられて、綾文を筆手に書き、銀の池を寫し、大塚川・嵐の山を給に描きて、	ぬひもの	綾、唐衣	衣服(女性)	羣手	女房
87	前麗景殿女御延子歌合	1050	1000	承承 5.4.26	打敷、雲霞の浮線綾に、卯花を縫ひたり。	ぬひ	打敷	生活用品	卯花	左方
88	前麗景殿女御延子歌合	1050	1000	承承 5.4.26	打敷、二藍の象眼に、白き文を縫ひたり。	ぬひ	打敷	生活用品	白き文	右方
89	前麗景殿女御延子歌合	1050	1000	承承 5.4.26	打敷、深緑の象眼に縫ひものしたり。	ぬひもの	打敷	生活用品		右方
90	古今著聞集	1050	1000	承承 5.4.26	打敷雲霞のふせんれうに卯の花を縫たりけり。	ぬひ	打敷	生活用品	卯の花	左方
91	古今著聞集	1050	1000	承承 5.4.26	打敷ふかみとりのさうかに綾物をしたり	綾物	打敷	生活用品		右方
92	本朝文様	1059	1000	康平 2.2.6	襲問(二)楚馬之衣(一)綾。	綾	衣	衣服		
93	栄花物語	1062	1000	康平 5.9.7	浮線綾の綾、唐衣、象眼薄物など金して透りたるに、菊の折枝、松など縫ひたるいとおかし。綾物の表袴なれど唐衣、綾などは多くは象眼薄物などをしたり。綾物は厚く、綾物は給かくもなかなかわるければなるべし。	ぬひぬひ物	表袴、唐衣、綾	衣服(女性)	菊の折枝、松	女房
94	狭衣物語	1070	1000		同じ色の松の表袴、藤の浮線綾の唐衣、「松にとのみ」縫ひ物にしたり。	縫ひもの	唐衣	衣服(女性)	歌「松のとのみ」	女房
95	狭衣物語	1070	1000		綾は、書き海獣の浮線綾に、沈の岩立て、黄金の砂に、白銀の波寄せて、没れる松の深緑の心をぞ、縫ひ物にしりける	縫ひ物	綾	衣服(女性)	波しぶきに没れた松	女房
96	本朝文様	1083	1000	承保 3.2.27	錦帳縫屏之下。	錦帳縫屏	屏風	生活用品		
97	鎌倉遺	1086	1000		かつ四つの集(万葉・古今・律撰、拾遺)は阿ぬもののごとくにてころ海よりもふかし	ぬもの		不明		例え
98	栄花物語	1088	1000	寛治 2.4.21	浮線綾の表袴に給かき綾物し、錦の袴を着、習ひつくすべくもあらず。	ぬひ物	表袴	衣服(女性)		女房



	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
99	中右記	1088	1000	寛治 2.11.11	「中將殿春日使」十一日、雨下、午後天晴、今日春日解使立、中將（藤原忠實）殿於東三條【割注】束帯【割注ここまで】、今出立給、未廻許事給、有三獻、一獻、（中略）從寮宮（堀子内親王）并姫宮（令子内親王）被獻束帯、【割注】紅打重袴、綾羅綿（錦）襪、美羅過登也、不給舞人、還立之日又給近友・敦季也、【割注ここまで】	錦	袴	衣服		近友・敦季
100	玉葛	1090	1000	寛治 4.11.5	後二條殿（藤原師通）寛治四年十一月十五日、八幡御幸日若給云々、而予所以之平結綿（二）紅羅（一）、近代々給吉事日頗可（二）用意（一）、仍不（レ）用（レ）之、	綿	平結	平結	紅羅	
101	後二条師通記	1090	1000	寛治 4.11.29	馬頭羅芳打衣也、殿下蘭菊染下襪、紺地平結、菊形綿物、金作襪地御給云々、	綿物	平結	平結	菊形	
102	後二条師通記	1092	1000	寛治 6.5.15	雨降、史來云、廿日百座仁王會料發給、令染綿而可道之由所申也者、着了、	染綿	襪	宗教		
103	中右記	1093	1000	寛治 7.3.21	廿一日、天晴、辰刻人々參集之後有御廻、申四點若御六條殿、【割注】其路如昨日、女院又御見物、【割注ここまで】兩日已無風雨、定知有神感之、（中略）／御神院宮動之、仍金銀綿類過登美羅也、	金銀綿	袴袴	衣服		
104	後二条師通記	1093	1000	寛治 7.3.20	殿下御櫻伊金作綿、甘地孔雀綿也、	綿	平結	平結	孔雀	殿下
105	後二条師通記	1093	1000	寛治 7.3.20	中納言歌冬綿物下襪、橘（羅ハ）木下袴、甘地襪綿物也、帶野豆、	綿物	平結	平結	橘	中納言
106	筑前國經世寺寶財帳案	1094	1000	嘉保 1	嘉保二年寶藏實録日記。／一見在。（中略）／第七御禮。（中略）／錢錢帛收。／前御云。入（二）瓜酒帳（一）。寛治六年帳云。今後同前。／今後。（中略）／第十三御禮。（中略）／綿綾文綿重衣以玉得束也。全。／今後。	綿	錢帛	宗教		
107	中右記	1096	1000	永長 1.2.20	廿日、前大僧正覺円今日申座、是牛車立旨之後申座也、前座八十人、童子等束束、唐物綿、美羅無極、増誓法務以下僧七人連立座後、	綿	童子束束	衣服		童子
108	中右記	1096	1000	永長 1.2.10	今日大殿御廻【割注】綿綿、紺地綿、錦孔雀、打下襪【割注ここまで】	綿	袴	平結	孔雀	大殿（師實）
109	中右記	1096	1000	永長 1.2.23	人々束束美羅過登、女房打出、金銀綿・珠玉・綿等不可記盡、今日遺恨、依兩脚止登樂也、	綿	打出	衣服（女性）		女房
110	中右記	1096	1000	永長 1.7.12	明月之前人々國師參御前、【割注】紅汗取、押銀綿文、指貫、冠上以官蓋爲笠指山鳥尾、若人々此外風流、綿綿作花、或淺羅、或赤鞋、【割注ここまで】	綿	束束	衣服	花	御前に參る人々
111	中右記	1096	1000	永長 1.7.13	束束、一袋衣、大口、冠上懸扇共爲笠指山鳥尾、此中風流金銀綿、或以唐綿爲袴、不可記盡、	綿	袴	衣服		田樂を見物する人々
112	後二条師通記	1096	1000	永長 1.2.23	女院御方西方也、女房打出綿綿照曜、	綿綿	打出	衣服（女性）		女房
113	宇治拾遺物語	1101	1100		「藤左衛門は綿をき給ひつ。海兵衛殿はぬひものをして、金の文をつけて」など語る。	ぬひもの	狩衣	衣服		源兵衛殿
114	中右記	1102	1100	康和 4.3.20	青海波二人【割注】通季・宗徳、【割注ここまで】若貴打平袴【割注】以銀押浪形・海潮・波文等、【割注ここまで】綿細綿、紺紺（地説力）、【割注】綾文等【割注ここまで】	綿	袴	平結	水文	青海波衣裝
115	中右記	1104	1100	長治 1.4.17	殿下出給【割注】北面、御下重衣倍支、有文御帶、袴地綿細綿、紫淡（綾）袴、【割注】綿孔雀【割注ここまで】【割注ここまで】承安三年宸前御賀祝節例也	綿	袴	平結	孔雀	殿下（藤原忠實）
116	殿座	1104	1100	長治 1.4.17	余裝束束倍キノシタカ七子、四ハヒ、ウキ文ウエノハカ丁ウエノ袴ウラ、ウチアコメ、ヒトヘキヌ、皆紅色、餘年來故殿（藤原師實）・宇治殿（藤原賴通）令若給御廻、平結紫淡（綾）平結、同故殿令若給、綿孔雀、車襪御	綿	平結	平結	孔雀	余（藤原忠實）
117	中右記	1105	1100	長治 2.4.15	小舍人置二人、【割注】白浮綿綾、襪物色々文、羅芳打衣、【割注ここまで】	襪物	打衣	衣服	色々	小舍人置
118	中右記	1105	1100	長治 2.4.17	殿下出御對南面【割注】羅芳下襪、袴地綿細綿、紫淡（綾）袴、【割注】綿孔雀、【割注ここまで】有文袴、【割注ここまで】上道部若殿、	綿	袴	平結	孔雀	
119	中右記	1105	1100	長治 2.12.25	令申座給、有文袴、袴地綿細綿、【割注】孔雀、【割注ここまで】紫淡（綾）袴、【割注】綿千鳥・四、【割注ここまで】前給、	綿	袴	平結	千鳥・綿	忠實
120	殿座	1105	1100	長治 2.12.25	今日裝束、（中略）平結、【割注】紫淡綿物、松折枝千鳥、初給之、但松折枝綿・千鳥相文ヲ爲上、【割注ここまで】	襪物綿	平結	平結	松折枝、千鳥、孔雀	忠實
121	中右記	1106	1100	嘉承 1.4.24	小舍人置八人、（二）藍綿袴袴袴、以白糸綿丸文、藤花結花付之、紅打衣、下襪、出衣	綿	袴袴袴	衣服	丸文（白糸）	小舍人置
122	中右記	1106	1100	嘉承 1.4.24	手組、【割注】青色、以紫糸綿丸文、二藍下襪、紫羅下襪袴、【割注ここまで】	綿		衣服	丸文（紫色）	手組
123	中右記	1106	1100	嘉承 1.4.24	襪色、羅羅芳袴袴袴、通打衣、以色々糸綿丸文、	綿	打衣	衣服	丸文（色々糸）	襪色
124	中右記	1106	1100	嘉承 1.4.24	取物薄敷冬濃衣、同綿丸文、【割注】袴打、【割注ここまで】中圓置、	綿	衣	衣服		襪色

平安時代における刺繍用途の変遷

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	装配	物	分類	模様	使用者
125	中右記	1106	1100	嘉承 1.4.24	牛飼置、(赤衣、歌冬打、以賀糸縫、) 草、(海鼠、寄縫、) 笠、(花模・時鳥、寄縫)	縫	赤衣	衣服	歌冬	牛飼置
126	中右記	1106	1100	嘉承 1.12.17	袷束如常、孔雀縫細綿、紫模細、縫孔雀、賀茂時被着用御給云々、	縫	緒	平緒	孔雀	忠通
127	殿歴	1107	1100	嘉承 2.4.16	紺色四人、[割注] 歌冬狩衣・袴、[割注] 縫歌冬折袴、[割注] 縫孔雀打衣、青屋、一人思久子(下毛野)、[割注] 右府生、[割注] 縫一人公種子、[割注] 余屋身、右府生、[割注] 縫一人安久子、[割注] 右番兵、[割注] 縫一人教皇子(下毛野)、[割注] 故殿、左府生(隨身脱力) [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫	縫	狩衣	衣服	歌冬	紺色
128	殿歴	1108	1100	天仁 1.10.21	女御代 一車、[割注] 寄赤車、[割注] 縫(中略) 并丹四人、青屋身紺色衣、[割注] 縫黃色露文、藤芳末通袴、葡萄染打屋半袴・下駄、歌冬打袴、青屋衣、裾袂、布帯、伊知比屋巾、在取物等 [割注] 縫[割注] 縫	縫	褐衣	衣服	黄色露文	手振
129	中右記	1108	1100	天仁 1.11.1	春日祭使、殿下中得殿令勤 仕給、(…) 布衣四位五人、(…) 袷束縫細綿、過忍無縫、或着打指貫、或以構風流、人驚耳目	縫	袷束	衣服		
130	中右記	1108	1100	嘉承 3.4.24	二藍織物狩衣、袴以白糸縫 丸文藤花、結花付之、紅打衣、下給出衣	縫	狩衣	衣服		
131	殿歴	1109	1100	天仁 2.4.26	今日袷束ヒヘキの下駄、半臂、自餘如常、(中略) 隨身四人、[割注] 袷袴衣、二藍狩袴、[割注] 縫山吹丸文 [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫	縫	狩袴	衣服	山吹丸文	隨身
132	殿歴	1109	1100	天仁 2.9.6	今日上皇御幸高陽院亭、御覽鏡馬、馬場御袷束儀、母屋座并實子敷御座、母屋座上敷唐綺 [割注] 實集縫露文、縫目有平紐、[割注] 縫[割注] 縫	縫	座上敷	生活用品	露文	
133	殿歴	1109	1100	天仁 2.9.6	其上敷御座一枚 [割注] 以白糸縫之、以紫糸縫文 [割注] 縫[割注] 縫	縫	上敷御座	生活用品	文(紫糸)	
134	殿歴	1109	1100	天仁 2.10.22	宵行漢半比・下履、御車副八人服、例袴衣縫露文、	縫	袴衣	衣服	露文	御車副
135	中右記	1112	1100	天永 3.2.6	今夕殿下中納言殿渡御東三条、(…) 人々袷束英履過 庭、或縫綿、或敷團、或着打指貫者、(…) 或作花鳥形也、各之風流不可勝計	縫	袷束	衣服		
136	勘抄	1115	1100	永久 3.2.9	婦平緒様々。/ 永久三二九内大臣一忠通一揮買、紫端平緒縫細。	縫	婦平緒	平緒	鶴	忠通
137	殿歴	1115	1100	永久 3.9.21	未冠 上皇(白河法皇) 入御自北面西門(中略) 半部御車、[割注] 御下履、在縫物、[割注] 縫[割注] 縫	縫	半部御車・下履	生活用品		
138	勘抄	1115	1100	永久 3.2	紺地平緒様々。(中略) / 同三二朝服。新大納言紺地平緒。孔雀寄縫。		平緒	平緒	孔雀寄縫	
139	朝野群載	1116	1100	永久 4.7.12	新制立旨七箇条 / 太政官府 檢非違使 / 雜事渡御候 / (中略) / 一 縫綿。二 重織物衣服。一切不(レ)可 (二) 着 (一) 事	縫	衣服	衣服		
140	勘抄	1116	1100	永久 4.1.1	紺地平緒様々。/ 永久四正一。殿下 [割注] 忠實 [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫 (二) 白絲 (一) 縫 (二) 白絲 (一) 也。	縫	平緒	平緒	白鳥、兼手、梅丸文	忠實
141	朝野群載	1116	1100		自賦 (二) 千金縫御車衣 (一)	金縫服	御車衣	衣服		
142	朝野群載	1116	1100		以 (二) 縫綿 (一) 為 (レ) 衣。	縫	衣	衣服		
143	朝野群載	1116	1100		着 (二) 帽子 (一) 縫 (二) 桶襖 (一)。	縫	桶襖	衣服		
144	御座部類記	1119	1100	元永 2.6.2	同面敷丈文袴物、有下給、以白糸縫小鳥等、	縫	面敷	生活用品	小鳥	
145	勘抄	1122	1100	保安 3.2	紺地平緒様々。(中略) 保安三三朝服。殿下 [割注] 忠通 [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫 白鳥肝也。	縫	平緒	平緒	白鳥	忠通
146	勘抄	1123	1100	保安 4.3.3	婦平緒様々。(中略) / 保安四三三新聞白 [割注] 忠通 [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫 下。紫端平緒縫松枝千鳥相交也。		婦平緒	平緒	松枝	忠通
147	勘抄	1123	1100	保安 4.10.15	婦平緒様々。(中略) / 保安四十五大書會御座、攝政 [割注] 忠通 [割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫 實鳳凰。	縫	平緒	平緒	實鳳凰	忠通
148	勘抄	1123	1100	保安 4.3.11	紺地平緒様々。(中略) 保安四三十一新聞白令(レ) 賜 (二) 隨身 (一) 之兼申 (レ) 度。紺地平緒。縫 (二) 兼手 (一)。	縫	平緒	平緒	兼手	
149	中右記	1129	1100	大治 4.1.1	右大臣・安忠・又於 (二) 敷政門内 (一) 着 (レ) 敷・御制代紫染袴以 (二) 糸 (一) 縫 (二) 鳳凰 (一) 也。	縫	平緒	平緒	鳳凰	
150	本朝統文粹	1130	1100	大治 5.1	俊思 (二) 縫綿於賀臣之衣 (一)。	縫		衣服		
151	本朝統文粹	1132	1100	天承 2.1.20	則披 (二) 縫綿於何時 (一)。	縫		不明		
152	本朝統文粹	1135	1100	保延 1.7.27	文織番組。傷女功者也。	文織		不明		
153	勘抄	1136	1100	保延 2.12.9	婦平緒様々。(中略) / 保延二十二九任大臣。[割注] 手治。[割注] 縫[割注] 縫[割注] 縫 孔雀。別當也。[割注] 縫[割注] 縫		平緒	平緒	孔雀	

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
154	飴抄	1136	1100	保延 2.12.13	紺地平緒様々。(中略)保延二十二十三宇治左府【割注】于時内大臣。【割注】こまで【慶申。紺地平緒。縫(二) 梅丸文(一)。	縫	平緒	平緒	梅丸文	
155	飴抄	1138	1100	保延 4.11.23	紺平緒様々。(中略) / 保延四十一廿三宇治左府御座。雄白袴。紫紺平緒。縫松鶴千鳥など。	縫	紺平緒	平緒	松鶴千鳥	
156	飴抄	1138	1100	保延 4.2.3	紺平緒様々。(中略) / 保延四二三春日祭。宇治丞相上殿。紫紺質平緒。		紺平緒	平緒	質鳳	
157	飴抄	1141	1100	永治 1.10	紫糸毛草 (中略) / 永治元十御親。(中略) 紫糸巻簾【割注】有(レ) 縫【割注】こまで	縫	下簾簾	生活用品	ふせぐみ	
158	飴抄	1151	1100	仁平 1.1.26	紺平緒様々。(中略) / 仁平元正廿六内大臣大嘗。【割注】宇治。【割注】こまで 紫紋質平緒。		平緒	平緒	質鳳	
159	飴抄	1156	1100	保元元 .7	青綾【割注】或稱(二) 袴綾(一) 刺殺東宮奉(一)【割注】こまで / 四五五月此用(レ) 之。縫(二) 紫玉(一)、最勝講出御袴用(レ) 之云々、或縫(二) 卯花燕等(一)、或縫(二) 花楓羅漢(一)、又縫(二) 貧孔雀色々唐花(一)、保元元七、相模筋、或配日、出居次袴、或寄袴下履、青綾平緒云云、	縫	平緒	平緒	紫玉 卯花燕 花楓羅漢 貧孔雀色々唐花	
160	飴抄	1157	1100	保元 2.11.8	鈍色 隙間之時用(レ) 之、重腰之人同用(レ) 之、但無(レ) 縫、保元二十一廿八、中山配日、重腰平緒鈍色絹帖(レ) 之、目(二) 普通平緒(一) 八三肝分袷帖(レ) 之、無(二) 起并縫(一)、	縫	平緒	平緒	無	
161	飴抄	1158	1100	保元 3.6.9	青袴 (中略) / 同筋。七月或配日。出居袴或寄袴。青綾平緒。竹書嘉祥二五廿三辰陽講。通成朝臣【割注】 歳十六【割注】こまで 着(二) 寄袴平背下重(一)。其色濃ハナヤカ也。【割注】地薄物【割注】こまで 襷綾平緒。【割注】縫卯花【割注】こまで	縫	平緒	平緒	卯花	通成朝臣一歳十六
162	後園院殿殿東抄	1161	1100	應保元	火色袴下履事。【割注】二條【割注】こまで 應保元年二月十日中山【割注】 虫腹【割注】こまで 内府配云。加伊藤八綱(二) 火色(一)。其體、西ハ紅打。裏ハ如(二) 紅草(一)。中座ハ紅色ヲハイスル也。不(二) 地重(一)。只中ヘヲ縫テ縫也。而故【割注】 家忠【割注】こまで 内府公ノ殿へ。隨弓之時紅打三重ヲ重テ着(レ) 之。件日皆通之同筋顔見吾云々。	縫		不明		
163	飴抄	1167	1100	仁安 2	舞人用(二) 紺地平緒古物(一) 事 / 仁安二殿配日。大納言殿御日。汝可(レ) 用(二) 希有紺地平緒(一)。近代人々用(二) 紫腰平緒(一)。不(レ) 知(二) 故實(一) 也。縫(一) 小鳥。小草。竹柄(一) 平緒也。	縫	平緒	平緒	小鳥、小草、竹柄	
164	飴抄	1167	1100	仁安 2.1	紅梅地【割注】 刺殺東宮奉【割注】こまで 多者隨弓臨時寄、着(二) 火色下履(一) 之人用(レ) 之、縫(二) 遠山小松等(一)、寛喜【割注】 後堀河【割注】こまで 臨時寄客(二) 尊者(一)、当时右府【割注】 實氏公【割注】こまで 着(二) 火色下履(一)、用(二) 此平緒(一)、其色事外濃薄ナル程ヲ染味、件平緒縫(二) 遠山(一)、仁安二正、隨弓、右大將【割注】 藤原親【割注】こまで 紅梅地平緒【割注】 縫(二) 白梅(一)【割注】こまで	縫、縫	平緒	平緒	遠山小松 遠山 白梅	
165	たまきはる	1173	1100	承安 3.10	女房四十人、みな藤芳村邊に装着、唐衣、綾の腰みなおなじ村邊なり。装着、唐衣には花結び、縫物、置き物、金を延べ、箔を押しなどし合ひたりき。	ぬいもの	装着、唐衣	衣服(女性)		女房
166	たまきはる	1173	1100	承安 3.10	局局の縫仕、袖、打衣、帷子に縫物、上、型木にさまざまの風流をして、なべては二人づゝありき。	ぬい物	帷子	衣服(女性)		縫仕
167	たまきはる	1173	1100	承安 3.10	懸縮ち、括り、さらにも言はず、我にも縫物をし、金をさえ延べつけなどしたりき。	ぬいもの	襷	衣服(女性)		縫仕
168	たまきはる	1176	1100	安元 2	金、鉾など制と聞こえしかど、身を始めて、破りたる人々多かりき。匂ひ尽くし、みな村邊、みな染め付け、みな鉾、みな唐綾、置き物、縫物。鉾の鳥摺り、鉾の綾、唐衣、袴、さまざまの心見えて、けしからざりし。	ぬいもの	重ね袴	衣服(女性)		女房
169	たまきはる	1176	1100	安元 2	中の日の綾、唐衣ばかりなりし日は、さながら浮縮綾、縫物などの様の衣どもを、桜の散り花摺り浮かし、鉾、縫物の綾、唐衣などにも桜の歌、詩などを衣の襟、唐衣、綾の腰に、いかにせんと置き縫い、金にてもし、木を打ちなど、心に袴、小袖、扇などまで、たゞ桜の花、珍しく清らかなる色ふしを、人にまさらんと心を尽くしたりし。	ききぬひ	衣の襟 唐衣 綾の腰	衣服(女性)	桜の歌、詩	女房
170	たまきはる	1176	1100	安元 2	わが身の事ばかり、例のおぼゆれば、そこがましけれど、一人をもこまかに書かば、これより事を言たる人もなかりしかば、推し置られなん。(中略) 三日、衣、打衣、装着、袴、唐衣に装、青きにて二重縫物、定に鉾の丸を縫う。縫を何にも結びて付く。紐も腰、唐綾の三小袖、文みな鳥。	ぬい	唐衣	衣服(女性)	鉾の丸	健御前(女房)
171	とりかえばや物語	1180	1100		浮縮綾のところで秋の草をつくして縫ひたる指貫に、尾花色の象図の横に紅の打ちたる脱ぎかけて、光を放ち、はなばなとめでたく、ただ今極楽の迎へありて彼の奥寄せたりともなほとどまりて見まほしき御有様なり。	ぬい	指貫袴	衣服	秋の草を 尽くし	中納言(女)

平安時代における刺繍用途の変遷

	書名	西暦	年代	記述年月日	本文	表記	物	分類	模様	使用者
172	平家物語	1184	1100	寿永 3.3.7	三位の中將の其日の装束には、かちにしろう装なる糸をもつて群千鳥めうたる直垂	ぬう	直垂	衣服	千鳥	
173	平家物語	1184	1100	元暦元 .2.9	銀形に四めうたる直垂に、荷貫句の翹翹で、銀形うったる甲の結しめ、こがねづくりの太刀をはき、	ぬう	直垂	衣服	鶴	歌盛
174	平家物語	1186	1100	文治 2.4.20 ころ	さしも本朝、漢土の妙なるたぐひ敷をつくして、紋羅錦織の装もさながら夢になりけり。	錦織	御衣	衣服		法皇の乳母の娘、阿波の内侍
175	筋抄	1192	1100		宿老人用 (二) 紫平緒 (一) 例。 / 建久三正一拝礼。中山【割注】忠親【割注ここまで】内大臣。【割注】紫綬。縫黄孔雀。【割注ここまで】関白。【割注】紫綬平緒【割注ここまで】	縫	平緒	平緒	黄孔雀	中山忠親内大臣
176	政治要略	1001	800	長保 3. 閏 12.8 or 元慶 9.1.16	縫者不 (レ) 在 (二) 縫羅 (一)。	縫者		不明		
177	筋抄	不明			紫綬【割注】刺装束藍草【割注ここまで】縫不 (レ) 定、孔雀、尾鳥、竹、桐、鳳凰、或唐花、四季花、但黄鳥神妙物也、或寄綴相文之時、春用 (レ) 之云々、此平緒壯年人モ用、宿老人モ用、但縫可 (レ) 有 (二) 用意 (一) 事也	縫	平緒	平緒	孔雀、尾鳥、竹、桐、鳳凰、或唐花、四季花、但黄鳥神妙物	
178	筋抄	不明			紺地【割注】刺装束藍皮【割注ここまで】古人多縫 (二) 祝物 (一)、唐鳥白黄若唐花能見 (レ) 也、此外千鳥梅若鶴松等多縫之、近代縫 (二) 種々新物 (一) 不 (レ) 被 (二) 甘心 (一) 事也、執府家縫 (二) 重手 (一) 平緒、多慶賀時用 (レ) 之、件平緒蓋慶賀自今令給之由、見 (二) 平治記 (一)、御登入道・藤原道長・平緒云々、定縫 (二) 祝賀歌僧 (一) 歌、心喪平緒無 (レ) 縫云々	縫	平緒	平緒		
179	筋抄	不明			白地平緒【割注】刺装束藍草【割注ここまで】稱 (二) 小忌平緒 (一)、著 (二) 小忌 (一) 之時用 (レ) 之、縫 (二) 桐竹若小草等 (一)、云々、- 是小忌文也・平治或秘記曰、大嘗會辰日若 (二) 小忌平緒 (一)、依 (レ) 無 (二) 其實 (一) 用 (二) 紺地 (一)、人々莫察如 (レ) 此、或用 (レ) 綾、抑小忌平緒者、白縫 (二) 小忌文 (一)、今度所 (レ) 不 (二) 見及 (一) 也	縫、縫	平緒	平緒	桐竹若小草 小忌文	
180	筋抄	不明			萌木地【割注】刺装束藍草【割注ここまで】春用 (レ) 之、予【割注】源道方【割注ここまで】見 (レ) 之、縫 (二) 紅梅白梅等 (一)	縫	平緒	平緒	紅梅白梅	
181	筋抄	不明			繡綾【割注】刺装束藍草或繡草【割注ここまで】多者九月月用 (レ) 之、縫 (二) 菊龍膽 (一)、或繡 (二) 紅紫 (一)、予【割注】源道方【割注ここまで】家用來賀平緒繡綾歌、【割注】著 (二) 綾平緒藍歌【割注ここまで】具平親王平緒云々、縫 (二) 菊枯野等 (一)、稱 (二) 左土院【割注】源朝【割注ここまで】御平緒 (一)、故藤清卿貞厚【割注】後堀河【割注ここまで】御親臨 (二) 仕大符代 (一) 之時用 (二) 繡綾平緒 (一)、縫 (二) 黄菊白菊 (一)、大嘗會【割注】午日喜祝【割注ここまで】於 (二) 東廊座 (一) 難殿之間、右府【割注】藤原實氏【割注ここまで】日、去御親公佐用 (二) 繡綾平緒 (一)、土御門大納言【割注】源定通【割注ここまで】問曰、繡如何、答曰、菊龍膽也、又問曰、繡草如何、繡草有 (レ) 該云々、右府曰、前後不 (レ) 依 (二) 刺装束 (一)、而用 (二) 繡草 (一) 之時、必用 (二) 繡草之後緒 (一) 云々、不 (レ) 得 (二) 其意 (一) 云々、【割注】昔者【割注ここまで】或人曰、繡草者繡草上ヲ染也、文貴也	縫、縫	平緒	平緒	菊龍膽紅紫 菊枯野 黄菊白菊 菊龍膽	
182	筋抄	不明			赤紐 (中略) / 平治秘記曰。赤紐。連打一井一藤旁打也。有 (二) 下給 (一)。押 (レ) 貝。或只所々押 (二) 貝計 (一)。或又二用 (二) 縫物 (一)。	縫物	赤紐	不明		
183	後園全院殿装束抄	不明			知足院殿【割注】藤原忠實【割注ここまで】仰云、白道二ハ紺地平緒、青草之足緒ノ刺 (中略) / 紺地事。 / 常時用 (レ) 之。 / 仰云。葦手平緒ハ紺地也。縫者【割注】倫子 (源朝殿) 御堂北政所【割注ここまで】自令 (レ) 縫給云々。或説。令 (レ) 付 (レ) 裏給云々。葦手一具物也。若陣之時多用 (レ) 之。	縫者	平緒	平緒	葦手	
184	物具装束抄	不明			背摺【割注】紺地二以 (二) 白糸 (一) 縫 (二) 桐竹 (一) 也【割注ここまで】	縫	平緒	平緒	桐竹	
185	本朝文粹	不明			繡 (糸偏に側) 縫而縫 (二) 幾春秋 (一)。委瑣以置 (二) 於殿庭 (一)。	縫		不明		
186	朝野群載	不明			繡 (二) 親自在菩薩像二繡 (一)。高各五丈四尺。廣各三丈八尺四寸。	縫	親自在菩薩像	宗教		

15 日の条

雑色、薄蘇芳狩衣袴、濃打衣、以色々糸縫丸文

【中右記】 嘉承元 (1106) 年 4 月 24 日の条

花柳烏ヲ繡ヒタル花文綾ノ覆ヒ

【内裏歌合 御記】 天徳 4 (960) 年 3 月 30 日の条

藤の裾濃の織物の御几帳に、折枝を繡ひたり<sup>16)</sup>

【栄花物語】 御裳着 治安 3 (1023) 年の条

同じ色の桜の表着、藤の浮線綾の唐衣、「松にとのみ」縫ひ物にしたり。

【狭衣物語】 卷三 (11 世紀半ば)  
(傍線筆者 以下同じ)

といった事例のように、「繡」「縫」「ぬふ」の前後に具体的な模様や物の名を配している。

また、「繡」の文字は常に刺繡の意味に使用され、「縫」の文字については、

其上敷四座一枚以糸縫之

【殿歴】 天仁 2 (1109) 年 9 月 6 日の条

のように、「紫の糸をもって文を縫う」と刺繡の意味として用いられたほか、

今日於南殿有如法百座仁王会、未尅許事始、(藤原家)右大將以下公卿十一人参入、行事藏人并為隆、(藤原)新羅契等藤原朝子、惣講師権少僧都定真、依無上臈也、呪願草今朝左衛門督被奏、(藤原)【中右記】 嘉承元 (1106) 年 6 月 22 日の条

十三日、天晴、依物忌不出行、神馬如常、

於此享有此事、雖物忌不籠乘尻等、中納言参院、新御願幡八流縫進中納言奉幣如常、壽賀

【殿歴】 永久 2 (1114) 年 11 月 13 日の条

のように、裁縫の意味で使用されている例もあり、刺繡を含めた針で布に糸を通す意味全般に使用されていたことが確認できた。

なお、

又請僧併給度者・布施、(法尊)神筆經・(法尊)縫仏(勸修寺内院並茶羅)甚希有也、

【貞信公記】 延長 3 (925) 年 8 月 23 日の条

延長三年八月廿三日 上供養御手書法華經及繡曼荼羅於勸修寺

【勸修寺文書】 延長 3 (925) 年 8 月 23 日の条

廿九日、辛酉、早朝参院、奉為(藤原安子)先后被行法會、堂装束云々、繡阿弥隨淨土曼陀羅・金泥法華經、自餘御堂雜具云々、  
【小右記】 永延元 (987) 年 4 月 29 日の条

御法事は正月にせさせたまふべければ夜を昼によろづいそがせたまふ。御仏は極樂淨土をぬひに繡にさせたまふ。

【栄花物語】 つるのはやし 万寿 5 (1028) 年 1 月 22 日の条

のように、繡仏の例をみると「繡」「縫」「ぬひ」の各文字で表記されており、刺繡の意味で使用された場合、「縫」の文字と「繡」の文字の間に使い分けはなされていないことがわかる。

#### 4. 平安時代以前の刺繍

現在残っている平安時代以前の刺繍作品は、中宮寺伝来の「天寿国繡帳」、法隆寺・東大寺伝来刺繍裂が主である(表Ⅰ)。それらは、その所蔵からもわかるとおり、仏教に関連するもの、献納されたものである。使用されている技法は、刺し繡、まつり繡、相良繡、また、中国の隋唐時代の刺繍に多く見られる鎖繡が主である。

文献における刺繍に関連する記述は、『日本書紀』に初見としていくつか例が見られる。例えば、武烈天皇 8 (506) 年 3 月の条には、「日夜常与宮人沈湎于酒、以錦繡為席。」と、武烈天皇の豪華な生活の記述の中に、「錦繡」で彩られた席(むしろ)が見られる。また、推古天皇 13 (605) 年 4 月の条には、「十三年夏四月辛酉朔、天皇詔皇太子、大臣及諸王、諸臣、共同発請願、以始造銅、繡丈六仏像、各一軀。」と、天皇の詔によって皇太子・大臣・諸王・諸臣共同の請願で銅と「繡」各々 1 軀の仏像が造られたことを記している。その他、唐の客人を迎える席での衣服に用いられている「繡」について<sup>17)</sup>や、「繡冠」のこと<sup>18)</sup>、禁式の中の制限のある技術のひとつ<sup>19)</sup>として「繡」が記されている。「繡」は多く天皇以下、皇太子・大臣・諸王・諸臣などに関わる記述の中に見られるほか、それらの人々による繡仏の製作に関する記事に見られる。

また、正倉院に所蔵される「花喰鳥文刺繍」と「孔雀文刺繍」は、それぞれ裏裂(白綾)、台裂(紫綾)が付けられており、これらの類裂が東大寺大仏開眼会や聖武天皇一周忌齋会用品として使用されたことがわかっていることから、この 2 点は日本製であると考えられている<sup>20)</sup>。使用される糸は無撚で、刺し繡を主とし、その他、所々に鎖繡や金糸を用いており、中国からの影響を強く受けていたと考えられる飛鳥時代の刺繍から少し変化した様相がうかがわれる。

#### 5. 平安時代の文献にみる刺繍の記述

##### 5-1 用途別にみる刺繍

平安時代の刺繍は、前述のとおり、実物作品の遺例はわずかである。それゆえ、その技法、用途などの実態をそこから推察するのは非常に困難であるが、文献にみる刺繍の記述は大変豊かであり、その表現は、前記の様々な文献資料に垣間見られる。

そこで、平安時代に記された刺繍が文献資料にどのように表現され、どのようなものに使用されているかを確認してみた。用途を

- ① 宗教関係
- ② 生活用品類のうち衣服以外
- ③ 衣服
  - 1 男性衣服
  - 2 女性衣服
  - 3 平緒
- ④ 用途の不明のもの

の 4 つに分類した。

①の宗教関係には、繡仏や幡、袈裟、その他経典や経帙など宗教に関するものが含まれる。「3. 刺繍に関わる言葉」ですでにあげた繡仏の例のほか、

后嘗多造<sub>二</sub>寶幡及繡文袈裟<sub>一</sub>。窮<sub>二</sub>盡妙巧<sub>一</sub>。左右不知<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>。後遣<sub>二</sub>沙門惠尊<sub>一</sub>泛<sub>二</sub>海入唐<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>繡文袈裟<sub>一</sub>。

『文徳実録』 文徳天皇嘉祥 3 (850) 年 5 月 5 日の条

のように、嵯峨天后橘夫人が繡文袈裟を自ら製作したこと、沙門惠尊を入唐させた際にその袈裟を持参させたという記述や、

弘仁二年九月廿五日資材勘録 一卷 / (中略) / 圓鏡一面 徑九寸一分、背螺鈿、緋緒、納縁縫綾箱。

『正倉院文書』 弘仁 2 (811) 年 9 月 25

## 日の条

と、内貼裂に刺繍を施した鏡箱の記述も見ることができる。

以上のことから、繡仏を含め、刺繍製作の依頼主は天皇・皇后などの皇族が多く、特別な場面で刺繍という技法が選ばれ、使用されていたことがわかる。これは、飛鳥・奈良時代に見られていたと同様の状況である。

②の生活用品類には、生活に関わる品のうち、衣服以外を分類する。打敷や覆い、帳や屏風など室内の生活用品、飾り付けられた乗物などである。

また、

其ノ覆ヒハ花紋綾ノ青末濃ニ柳ノ折枝之  
繡文ヲ加フ

『内裏歌合 殿上日記（蔵人日記）』 天  
徳 4（960）年 3 月 30 日の条

打敷、翟麦の浮線綾に、卯花を繡<sup>ぬい</sup>ひたり  
『前麗景殿女御延子歌絵合』 永承 5  
（1050）年 4 月 26 日の条

とあるように、歌合や絵合のような物合の記録では、必ずと言っていいほど、刺繍がほどこされた覆いや打敷が登場する。

刺繍製品の使用者と用途に関しては、

宮の御は二藍に、雲だすき、秋の野の形  
を移し、薄、虫、鳥の形を色々に繡<sup>ぬい</sup>はせ  
たまへり。

『宇津保物語』 楼の上 上（10 世紀末）

十七日、壬戌、（中略）候内蔵寮御即位  
雑具焼亡一次多以焼了、就中執翳々等  
破損、為寛持来、見之破損有其数、本翳  
縫物也

『御堂閨白記』 長和 5（1016）年 1 月  
17 日の条

のように、宮（女一宮）の御車や、後一条天皇即位のための雑具（本翳）に使用されている事例以外にも、皇族関係者の乗物（表Ⅲ -137）や彼らを迎える部屋の装飾（表Ⅲ -63）に頻繁に使用されている。生活用品においては主に身分の高い人物のための設えに用いられていることがわかる。

③には衣服を分類した。③-1 は狩衣や装束など男性の衣服に関するものである。

いろいろの襖のつきづきしき<sup>ぬいもの</sup>縫物、括り  
染のさまもさる方にをかしう見ゆ。

『源氏物語』 関屋（1008）

（皇子内親王）（皇子内親王）  
從齋宮并姫宮被獻摺袴、紫打重袴、紫打重袴（御旦）襦、  
紫打重袴也、不踏袴、紫打重袴

『中右記』 寛治 2（1088）年 11 月 11 日  
の条

雑色四人（紫衣袴・袴、紫衣袴、紫衣袴、紫衣袴、紫衣袴、紫衣袴、紫衣袴、紫衣袴）  
子、右殿長、一人紫衣子（下毛  
袴）、左殿、左殿生（御命被め）

『殿曆』 嘉承 2（1107）年 4 月 16 日  
の条

浮線綾のところどころ秋の草をつくして  
縫<sup>ぬい</sup>ひたる指貫

『とりかえばや物語』 吉野入山（1183）

以上の例からは、男性の衣服において、襖・袴・狩衣・指貫などに刺繍が用いられていたことがわかり、男性の衣装であっても、款冬（フキ）や秋の草のような華やかな模様の刺繍が用いられていたことが確認できる。

③-2 は、衣服の中でも唐衣や裳など女性のものである。これらは、女性の文学において多く見られる。

大式部のおもとの裳、唐衣、小塩山の小  
松原をぬひたるさま、いとおかし。大式

部は陸奥の守の妻、殿の宣旨よ。(中略)  
弁の内侍の、裳に白銀の洲浜、鶴をたて  
たるしざま、めずらし。裳のぬひ物も、  
松が枝のよはひをあらそはせたる心ば  
へ、かどかどし。  
『紫式部日記』(1008)

同じ色の桜の表着、藤の浮線綾の唐衣、  
「松にとのみ」縫ひ物にしたり。  
『狭衣物語』(11世紀半ば)

色聴されぬは金して螺鈿し、絵かき、縫  
ひ物など、いみじうもの狂ほしきまでしつ  
くしたり。  
『栄花物語』 根あはせ (1046)

女院御方西方也、女房打出縫鈿照曜、  
『後二条師通記』 永長元(1096)年2  
月23日の条

以上はすべて宮仕えの女房たちの衣装であ  
る。平安時代には、服色によって身分を表す制  
度により、位階相当の色、すなわち当色が定め  
られ、それより上位の服色を用いることや、天  
皇・上皇などが用いる色や錦・二階織物を使用  
することが禁じられていた<sup>21)</sup>。

身分のあるものは、それぞれが許された中で、  
刺繍を施すことにより、できる限りの装飾を施  
していたことがわかる。女性の衣装における刺  
繍の用例は、女房のものが主で、皇后・中宮の  
衣装に見られる例が各1件ずつ、女房よりも  
下位の女官・雑仕の衣装に見られる例が各1  
件となっている。

③-3は平緒である。平緒は、「さまざま糸  
で組んだ平打ちの紐。平安時代、儀仗の剣を吊  
るために使用する帯」<sup>22)</sup>であるが、これも位に  
よって使用できるものが限られている。それは、  
身分を重要視する平安時代においてその装飾が  
大きな意味を持ち、必要不可欠なものであった  
からである。平安後期においては、着用者など

人物の特定ができる記述が多かったため、前述  
の二分類とは別に分類した。

殿下樺櫻伊金作紐、甘地孔雀縫也  
『後二条師通記』 寛治7(1093)年3  
月20日の条

今日装束、(中略)平緒、紫端平緒、松折枝千鳥・鶴  
上、  
『殿暦』 長治2(1105)年12月25日の  
条

以上の2例は、それぞれ上皇(白河上皇)  
八幡御幸の際の殿下(藤原師実)の身なりと、  
藤原忠実の身なりの記録である。それぞれ、平  
緒に孔雀や松折枝・千鳥・鶴などの刺繍が施さ  
れていることがわかる。

端平緒様々。/永久三二九内大臣拝賀。  
紫端平緒縫鶴。保安四三三新関白萬機詔  
被<sub>下</sub>。紫端平緒。鶴松枝千鳥相交也。  
『飾抄』 源通方(1189～1139)著

平緒の事 此もの朱雀村上の御宇よりや  
初りぬらん、剣の緒をうるはしくせむと  
て、廣くして中に縫したる(後略)。  
『服飾管見』 安永4(1175)年凡例成立

これらは、鎌倉時代初期の故実書『飾抄』(土  
御門適方著)、江戸時代成立の『服飾管見』(田  
安宗武著)に見られる記述であるが、過去の記  
録の中から平安時代当時のことを述べており、  
それぞれ永久3(1115)、保安4(1123)に藤  
原忠通が用いた平緒の様子や、朱雀・村上両天  
皇の時代に刺繍の入った平緒が特別な時に使用  
されたこと、また、それがどのようなものであ  
ったかを述べている。

④は、刺繍とはわかるが用途不明なものとし  
た。



むつかしげなるもの <sup>ぬもの</sup>縫い物の裏  
『枕草子』 むつかしげなるもの (1001)

かつ四つの集は詞ぬもののごとくにてこ  
ころ海よりふかし  
『後拾遺和歌集』 序 (1086)

何にほどこされたものかはわからないが、『枕草子』では、刺繍の裏側がむさくるしいものの一例としてあげられ、『後拾遺和歌集』の序では、たとえて「詞（ことば）は、ぬもの（縫物）のようだ」と述べられている。「ぬもの（縫物）」と言えは読者はどのようなものかがわかり、刺繍が当時多くの人々になじみの深いものであったことがわかる。

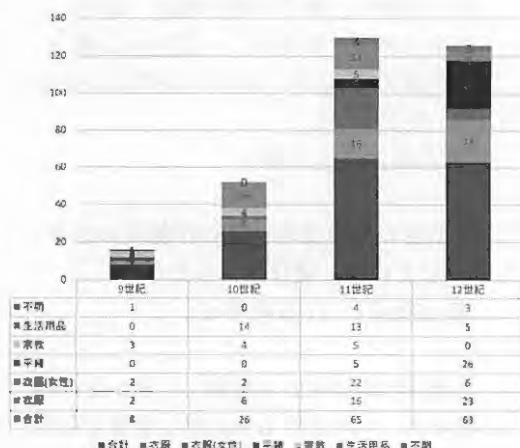
このように、平安時代において刺繍は、使用される用途が限られており、身分の高い者を中心に使用され、あまり男女の差がなかったことがわかる。

## 5-2 年代別にみる刺繍

次に、これらの用例を年代順に整理する作業を行った。その用例数は、時期ごとに大きく推移している。平安時代を区分する場合、多くは政治的観点から 3 期に区切られるが、今回は、用例の推移を計ることを目的とするため、単純に約 100 年ごとの 4 期に区分して、その傾向を見た。

それぞれの時期に見られる刺繍についての用例は、記述により、使用時期が明らかなものと、文献の成立年代をもってその時期を推測せざるを得ないものがある。物語についても、当時の世相や状況を反映して書かれていることが多いため、用例はその物語成立年代前後の状況を反映していると仮定して分類整理を行った<sup>23)</sup>。また、成立年代の分からないものについては、用例から除外した。その上で、100 年毎に、用例を刺繍の用途で分類したものをパーセンテージ化してグラフとし、その割合の推移を確認した。(表Ⅳ)

表Ⅳ - 年代別 用例数変遷



まず 9 世紀においては、刺繍について記された記述は管見の限り 8 件と少なく、分析の対象としては弱い。刺繍が用途①の宗教に関連する用品に使用されている例が半数を占めた。宗教関係のものは、その注文主が嵯峨天皇后橘夫人(表Ⅰ-6)などの高貴な人物であることがわかる。

10 世紀となると、刺繍に関する用例は 26 件とふえる。打敷・覆いなど生活用品に使用されている事例がそのうち 14 件 (54%) と約半数を占め、衣服は平緒を含む衣服全体で 8 件 (34%)、その他は宗教関係のものが 4 件 (15%) 程度となり、他の用途に比べて生活用品への刺繍の使用が目立つようになる。

生活用品は、実用と装飾を兼ね備えたものが多く、耐摩耗性を考えれば刺繍は必ずしも最適な技法とはいえない。しかし、生活用品に刺繍が用いられている例は、その後 11 世紀に 13 件となり、12 世紀には 5 件と継続的に使用される。使用される用途は、物合 (歌合や絵合など) の装飾のための用品が刺繍使用例全体の 3 分の 1 となっており、その他、刺繍は乗物や帳、褥にも用いられているが、そのすべてが、天皇・皇后、またはそれに準ずる者を出迎えるための

用品である。

これらのことから、生活用品における刺繍は、10～12世紀という長い期間に渡って使用され、要人のための特別な品を装飾する目的のために特に選ばれた技法であったことがわかる。また、9世紀のごく限られた使用例からの広がりを見れば、刺繍が比較的身近なものになり、その使用が容易になってきたことがわかる。

11 世紀になると、刺繍の用例数は 65 件と増加する。ここで特徴的なことは、裳や唐衣・袴など、女性の衣服に施された刺繍の記述が 22 件（34%）と増えることである。これはこの時期に、衣服の記述（刺繍についての記述も含む）の多い「紫式部日記」や「栄花物語」などの女房日記が増えることも関係しているが、「御堂関白記」や「小右記」、「中右記」、「殿暦」などの記録類においても、刺繍についての記述は、10 世紀の 3 件に対して、11 世紀は 26 件と増加傾向を見せている。このことから、10 世紀から 11 世紀にかけて衣服に関する刺繍の記述が全体的に増えているといえる。

【栄花物語】には衣服に刺繍が用いられた例が10例見られるが、そのうち9例が女房衣装であり、1例が殿上人たちのものとなっている。その記述の中には、「ただの人々」（表Ⅲ-75）や「色許されぬ」（表Ⅲ-83）といった表現が見られ、禁色に触れないよう、許された身分の中で最上級の装いを求める者たちの姿が垣間見られる。その場面は内親王の立后、裳着のような晴れの日や中宮を迎える歌合など、大事におけるものである。しかしその使用者は、天皇・皇后などの皇族ではなく、それに仕える者であり、刺繍の使用が一般化してきたことがわかる。

また、「小右記」寛仁元（1017）年 9 月 21 日条には、以下のような記述がある。

廿一日、丙辰、地摺袴腰襪、（平）  
田村以致光令  
續、今日持來、給疋絹  
今日齋王出宮内省、祓禊東河、入野宮、  
上達部前驅、大納言俊賢、皇太后  
宮大夫（中略）

見物者云、衝黑向給河原云々、禊路用待  
賢門大路云々、明日大殿被參石清水之御  
人袴、地蔵、尊經、久、力、張船、藤、象田、龜形、桑田村藏、三笠殿、黄昏以右衛門權  
佐章信奉之、

これは、平致光という人物が、依頼された刺繍を持ってきたという記述である。袴腰部分に菊の刺繍を施したものであったことがわかる。

また、鎌倉時代成立の「後照念院殿装束抄」(鷹司冬平著)には次のような記録がある。

紺地事。

常時用之。

仰云。葦手平緒ハ紺地也。紺者麿司殿  
跡上自令縫給云々。或説。令付裏給  
 云々。葦手劔一具物也。着陣之時多用之。  
 【後照念院殿装束抄】 白重時劔緒平緒事

これは、源倫子の手によって藤原道長の平緒に葦手の刺繍がなされた<sup>24)</sup>という記録である。時期はわからないが、倫子と道長との婚姻が987年、道長の死去が1027年とすると、その間であることは明らかである。「令…給」は天皇・上皇に使用される最高の尊敬表現であるが、「倫子やその姫君達には道長と同格の「せ給ふ」「させ給ふ」のような二重敬語が使用されて」<sup>25)</sup>おり、倫子が「自ら繡はせ給うた」(自ら刺繍した)ことは確かであろう。「文徳実録」に見られる「后尊多造・齊幡及繡文袈裟。」(表Ⅲ-6)といったような製作発注者という意味ではなく、倫子自身が刺繍の担い手であったと考えられる。

このように、11世紀には、刺繍を担った人物も、特定の職人だけに限らず、身近なそれを得意とする人物などにも任されるものとなっていたことがわかる。

最後の12世紀になると、刺繍の宗教関係の品における使用例は見られなくなり、衣服における刺繍の記載が55件、全体の85%を超え、生活用品における刺繍と用途不明の刺繍のそれぞれ4件の記載が残り占める。

これらのことから考察すると、平安時代において、宗教関係など特別な場面で特別な人物のために使用されていた刺繍は、10 世紀に入り、生活用品をはじめとする身近な場面へとその使用用途を移し、11 世紀に至って、衣服のようなごく実用的なものへの装飾が主となっていったことがわかる。一方、特別に詠える宗教関係の品・生活用品への使用が減っていくことは、刺繍の希少性が減り、使用・製作の容易さが増して、これが一般的な技法となり人々の間に浸透していったことを示している。この時代におけるその用途変遷がその後の刺繍用途へも影響することは、明らかである。

## 6. おわりに

現在、鎌倉時代の遺物として残るものは、繡仏が主となっている(表Ⅱ)。しかし、その繡仏は、飛鳥・奈良時代に製作されたような丈の大きなものではなく、100 cm 程度の小型のものばかりである。鎌倉時代には、「追善・逆修の広まりとともに、故人の遺骨や毛髪などを仏像に納入したり、紙に漉き込んで写経したりすることが行われ、繡仏ではいわゆる髪繡が盛んに行われて繡仏が流行した」<sup>26)</sup>とされている。このようなことから、鎌倉時代以降の繡仏は、「貴人や近親者の追善・逆修や、あるいは念持仏として造顕されるというような、限定的、個人的な営為の性格が強かった」<sup>26)</sup>と考えられる。

平安時代において、刺繍製作が容易になり、その技術と用途が一般化されていったことは、これまで見てきたとおりである。そのことと合わせて考えれば、鎌倉時代において、庶民のものとなった仏教、そこに帰依する手段として刺繍による仏画製作が選ばれたことは、必然であり、その流れに通じるものではないだろうか。

鎌倉時代における刺繍遺物が宗教関係のものにはほぼ限られていることの理由と、平安時代において、生活用品・衣服など実用的なものへと使用を広げた刺繍が、その後、どのように発展

したかを明らかにすることは、今後の研究課題としたい。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、神野藤昭夫先生(跡見学園女子大学名誉教授)には、ご助言とご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

- 1) 新村出『広辞苑』第五版、岩波書店、1998、p.1048
- 2) 切畑健「特集日本の刺繍」『染織の美』第 9 号、1981、p.67 には、飛鳥時代の刺繍について「刺繍にかぎらず古い時代の染織遺品はきわめて少ない。日本文化の展開を考える上で、仏教伝来のこの時代は大へん重要であるが、刺繍についてもそれまでの時代をうかがうてだては皆無にひとしく、当代(飛鳥時代：筆者加筆)を迎えて初めて文献や遺例を見出すのに注目される。それは主として仏教に関係する」と解説されている。
- 3) 重要文化財 大日如来像 鎌倉時代 13 世紀 京都細見美術館蔵
- 4) 重要文化財 三昧耶幡 鎌倉時代 14 世紀 奈良国立博物館蔵
- 5) 河上繁樹「日本の刺繍」『日本の染織』、京都書院、1993、p.89  
小椋順子『日本の古刺繍』源流社、1993、p.83  
『日本の刺繍－飛鳥時代から江戸時代まで－』、徳川美術館、1998、p.140
- 6) 山中裕『古記録と日記』上巻、思文閣出版、1992、pp.4-8  
文化庁、斎木一馬、岡田譲、倉田文作、田中一松、田山方南、本間薫山、米沢嘉圃編『文化財講座 日本の美術 16 古文書』、第一法規出版、1979、pp.12-19
- 7) 中国の思想書。後漢の王充(27 年-1 世

- 紀末) 著。「日本への伝来も古く、9 世紀末の『日本国見在書目』にも記事があり、(後略)」と綿本誠「論衡」、明德出版社、1983、p.37 にある。
- 8) 山田勝美「論衡」、明治書院、1979、p.821
- 9) 鈴木虎雄訳「杜甫全詩集」第 4 巻、日本図書センター、1978、p.37
- 10) 中国の漢字字書。略して「説文」ともいう。許慎著。後漢、西暦 100 ～ 121 年に成立。
- 11) 段玉裁「説文解字注」、藝文印書館、1807、p.655
- 12) 源順著、正宗敦夫編「和名類聚鈔」、現代思潮社、1978、p.15
- 13) 反切とは、「広辞苑」第五版によれば、「中国で、漢字音を示すのに、他の漢字 2 字をかりてする法。上の字（父字または音字）の頭子音と、下の字（母字または韻字）の韻とを合わせて 1 音を構成するもの。(中略) 切韻。」とある。この場合、「息」の x、「又」の you を合わせ、xyou を表す。
- 14) 狩谷棧齊著、京都帝国大学文学部国文学研究室編「箋注和名類聚抄」、全国書房、1943、p.176
- 15) テキストの引用にあたり、物語については「新編 日本古典文学全集」小学館を、古記録については「大日本古記録」東京大学史料編纂所を、古文書については「平安遣文」東京堂出版、「大日本古文書家わけ文書」東京大学史料編纂所を利用した。ただし、「古今著聞集」は、「国史大系 古今著聞集・愚管抄」国史大系編修会を、「文華秀麗集」「歌合」「後拾遺和歌集」「たまきはる」「菅家文草 菅家後集詩篇」は「新日本古典文学大系」岩波書店を利用した。また、その際、漢文の割注は【割注】と【割注ここまで】ではさむ形とし、返り点については（ ）でかこった。和文体については底本の仮名を「表記」の列に記した。
- 16) 和文体については、底本の仮名をふりがなとして明記した。
- 17) 「壬子、召唐客於朝庭、令奏使旨。(中略) 是時皇子・諸王・諸臣、悉以金髻華著頭。亦衣服皆用錦・紫・繡・織及五色綾羅。」  
小島憲之「日本書紀」新編日本古典文学全集、小学館、1994、p.559
- 18) 「是歳、制七色一十三階之冠。一曰、織冠。有大小二階。以織為之、以繡裁冠之縁。服色並用深紫。二曰、繡冠。有大小二階。以繡為之、其冠之縁・服色、並同織冠。」  
「日本書紀」同上、p.166
- 19) 「辛丑、立禁式九十二条。因以詔之曰、「親王以下、至于庶民、諸所服用金・銀・珠玉・紫・錦・繡・綾及氍毹・冠・帶并種々雜色之類、服用各有差。」  
「日本書紀」同上、p.407
- 20) 松本包夫「正倉院裂と飛鳥天平の染織」、紫紅社、1984、p.196
- 21) “禁色”, 日本大百科全書 (ニッポニカ), JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2015-09-25)
- 22) 板倉寿郎、野村喜八、元井能、吉川清兵衛、吉田光邦監修「原色染織大辞典」、淡交社、1977、p.920
- 23) 物語の成立年代については、日本古典文学大事典編集委員会「日本古典文学大辞典」、岩波書店、1986 を参考とした。
- 24) 「ある説では、裏を付けた」とも記述されているが通常平緒に裏はない。
- 25) 松村博司「栄華物語全注釈 2」、角川書店、1985、p.374
- 26) 伊藤信二「繡仏」「日本の美術」470 号、至文堂、2005、p.28